

第19回 寺子屋シャーラ静岡 オンラインスピーチ

クオリティ・オブ・デス (Quality Of Death)
—— 〈泣いて〉生まれて 〈笑って〉死ぬ ——

1. クオリティ・オブ・デス、〈いのち〉を生きる〈死に方〉

日ごろよく耳にする「クオリティ・オブ・ライフ (QOL)」ということばがあります。日本語では「生活の質」と訳されますが、「人生の生き甲斐・暮らしの満足度」の意味で使われています。とくに医療や介護の分野では、患者 (または利用者) とその家族が「かくありたい」と望んでいる生き方 (ウェイ・オブ・ライフ) の満足度を的確にとらえ、その生き方をしっかり支えるケアを行う上で、とても重要な考え方のひとつです。

本日のテーマ、「クオリティ・オブ・デス (QOD)」は、ある個人の一時点での「死 (肉体の細胞死、心停止、呼吸停止)」を意味する医学的な「デス (Death)」だけでなく、ある個人が死にゆく過程、「ダイイング・プロセス (Dying Process) や遺族に対する精神的なケア、「グリーフ・ケア (Grief Care) を含む概念としての「ダイイング (Dying)」をより重視した「ナチュラル・ダイイング・プロセス (Natural Dying Process) という言葉であらわされるようになりました。

近年、いま生きている時間 (ライフ・タイム) の「クオリティ・オブ・ライフ」と、いつか迎える終末期 (ターミナル・ステージ) の「クオリティ・オブ・デス」との間に、生 (ライフ) と死 (デス) を区分けする一本の太い線を引く、つまり、「人間、死んだら、一卷の終わり」的な死生観ではなく、仏教の死生観をあらわす「生死一如 (しょうじいちにょ)」のように、「生きているということは、いつか死ぬ。死ぬということも、死ぬまでは生きている。生と死とは切り離すことができない、ひとつのものである」という考え方が注目されるようになりました。私はそれをさらに進めて、「生」と「死」をひとつに貫いて生きる「命 (いのち)」の視点をもちたいと思っています。

たとえば、私流の日本語訳ですが、英語の「クオリティ・オブ・デス」を「安らかな死を迎える〈生き方〉」という日本語で、やはり英語の「ナチュラル・ダイイング・プロセス」を「自然な死を迎える〈生き方〉」という日本語の文脈で考えてみたいと思います。

なぜ〈死に方〉ではなく〈生き方〉なのか、それは、私たち人間の死亡率は誰でも間違いなく100%、つまり人間はいつか必ず「死を迎える」こと、そして「死」を迎えるその瞬間までは確実に「生きている」ことから、の人生の終点としての〈死に方〉ではなく、安らかな死を迎えるまで、いや死んだあともなお、〈いのち〉を生きる〈死に方〉に焦点を当てたいと考えたからです。

2. 「泣きながら」生まれてきて、「笑いながら」死んでゆく

先月から始まった、文教大学のオンライン配信講座、「(からだ) をゆるめて (こころ) をほぐす」の1回目冒頭に、作家・五木寛之さんのことば「人生は何でもやればできる」というポジティブシンキングだけでなく、「長い人生には、思い通りにならないこともある」というマイナス思考、ネガティブシンキングにも目を向けよう。を紹介したところ、受講者の一人から「なぜ、五木さんは、ポジティブシンキングだけでなく、ネガティブシンキングを、とおっしゃったのでしょうか？」という質問がありました。『大河の一滴』(五木寛之著、幻冬舎、1998年) の

中で、マイナス思考・ネガティブシンキングの勧めについて、次のように書いています。

【私たちは、人生は明るく楽しいものだとして最初から思いこんでいる。それを用意してくれるのが社会だと考えている。しかし、それはちがう。

シェークスピアの『リア王』の登場人物がつぶやくように、「人は泣きながら生まれてくる」のだ。私はこれまでもくり返しそのことを書きつづけてきた。この弱肉強食の修羅の巷、愚かしくも滑稽な劇の演じられるこの世間という円形の舞台に、私たちはみずからの意志でなく、いやおうなしに引き出されるのである。あの赤ん坊の産声は、そのことが恐ろしく不安でならない孤独な人間の叫び声なのだ、と嵐の荒野をさまよう老いたリア王は言う。

これをネガティブで悲観的な人生観と笑う人もいるかもしれない。しかし、かつてはブッダ(仏陀)の出発点も、「生老病死」の存在としての人間を直視するところからだった。この「生老病死」を人間のありのままの姿とみる立場こそ、史上最大のマイナス思考だといってい。

問題は、そこから出発する、ということではないだろうか。「泣きながら生まれてきた」人間、「生老病死」の重い枷をはめられた人間、そのような人間のひとりとしての自分が、それでもなお、豊かに、いきいきと希望をもって生きる道があるのか。それともないのか。答えのないその問いに全存在を賭けて二十九歳の青年ゴータマ(ブッダ)は旅に出たのだ。妻を捨て、子供を捨て、地位と名誉と平安な生活を捨てて、彼はひたすら人間探求の道を歩みつづける。

いまこそ私たちは、極限のマイナス地点から出発すべきではないのか。人生は苦しみの連続である。人間というものは、地球と自然と人間にとって悪をなす存在である。人は苦しみ、いやおうなしに老い、すべて病を得て、死んでゆく。私たちは泣きながら生まれてきた。そして最後は孤独のうちに死んでゆくのだ。

そう覚悟した上で、こう考えてみよう。

「泣きながら生まれてきた」人間が、「笑いながら死んでゆく」ことは、はたしてできないものなのだろうか。

それはなかなかむずかしいことのような気がする。しかしマイナス思考の極みから出発したゴータマは、少なくとも微笑みながら病で死んだ。その臨終の物語は、彼が自分の上に影を落とす樹々の姿を「世界は素晴らしい」と讃えつつ自然に還っていったことを述べている。最大の否定から最高の肯定へ、マイナス思考のどん底から出発して世を去った人間だったからこそ、二千年のいまも、多くの人びとはブッダの生涯に熱い心を寄せるのではあるまいか。】

(『大河の一滴』「人はみな大河の一滴」16~18ページ)

極限のマイナス地点、嘆き悲しむべき「死」という最大の否定を、「笑いながら死んでゆく」という最高の肯定へと導く「クオリティ・オブ・デス」のとらえ方や「安らかな死を迎えるまで、笑いながら生きて死ぬ(生き方)」を考えるヒントが、ここにあります。

3. 〈からだ〉をきたえる健康法から〈いのち〉をやしなう養生法へ

やはりオンライン講座の第1回目で、「〈からだ〉をきたえる健康法から〈いのち〉をやしなう養生法へ」について話しました。なぜ、きたえる(健康法)ではなく、やしなう(養生法)なのか、それは、『致知』のインタビューで、五木寛之さんが語ったことばがヒントになっています。

【五木 実際、いまは空前の健康ブームといってもいいくらい、マスコミや書店にはいろんな健康法が氾濫しているし、そういうものに踊らされてしまいがちです。けれども本当は健康法の問題じゃない。大事なのは養生だと私は思います。

—— 健康法ではなく、大事なのは養生だと。

五木 養生というのは、ただ体を維持するというだけでなく、生を養うことです。自分の可能性を十二分に発揮して、人生をしっかりとエンジョイするために、自分で自分の体をケアすることなんです。なんとなく古臭いイメージがあるので、健康法とかアンチエイジング（※抗加齢・抗老化）とかいうことのほうが新鮮に感じるんだらうけど、私はいま大事なのは養生だと思いますね。】

(『致知』2012年12月号「大人の幸福論」より抜粋)

漢字熟語の「健康」を『広辞苑』(新村出編、岩波書店、1955年)で引くと、「身体に悪いところがなく、すこやかなこと。達者。丈夫。壮健」、同じく「養生」は「①生命を養うこと。健康の増進をはかること。衛生を守ること。摂生。②病気・病後の手あてをすること。保養。」とあります。

和語の「すくやか〔健〕」を『字訓』(白川静著、平凡社、1995年)で引くと、「ものに屈しない剛直なようすをいう。「すく」は直。曲折することのない状態をいい、のちに健康の意になった」、また、「やしなふ〔養〕」は「はぐくんで育てる。その生長を助けることをいう」と解説されています。

「きたふ〔鍛ふ〕」を『角川古語辞典』(久松潜一・佐藤謙三編、角川書店、1955年)で引くと、「①金属を火で熱し、打って硬度を高める。精錬する。②繰り返して習熟させる。修練する。」とあり、①は〈からだ〉(物理的な肉体)を精錬する、②は〈こころ〉(目に見えない働き)を修練するという意味があります。

五木さんの「(健康な)体(の状態)を維持する(アンチエイジング)というだけでなく、生(いのち)を養うことです」、「人生をしっかりとエンジョイするために自分で自分の(いのちの容れ物である)体をケアする(養う)こと」ということばから、全5回のオンライン講座を通す共通のモチーフ(主な題材)を「〈からだ〉をきたえる健康法から〈いのち〉をやしなう養生法へ」としたのです。

4. 見栄を張る〈こころ〉、嘘がつけない〈からだ〉

私たちは「身体・精神」を表すときに、ふつう「体(體)・心」と漢字で書いています。



「体」の旧字体である「體」は、骨扁(ほねへん)に豊(ハウ)が旁(つくり)の会意文字(2文字以上の漢字の形・意味を組み合わせで作られた漢字)です。「骨」は頭蓋骨を支える脊椎の先端にある骨を示す冎(カ)冠(かんむり)の下に、月(にくづき)を配した形です。旁(つくり)の「豊」は、豆(たかつき=食物を盛る脚付きの台)に、穂(穀類)を盛った形を表しています。つまり、たくさんの骨が密度高く集まったものを〈からだ〉とみたのです。

ちなみに、骸骨の骸(ガイ)は、身体を支えるすべての骨を意味します。

「心」のほうは、文字どおり心臓の形を描いた象形文字(※古代中国の殷墟から出土した甲骨文字)

です。ときに速く打ち、あるいはゆっくりと打つ心臓の鼓動(心拍)を、昔の人たちはそのときどきの〈こころ〉の働きとみたのでしょうか。

本日のオンラインスピーチでは、漢字で書く「体(體)」と「心」を、それぞれ平仮名の〈からだ〉と〈こころ〉で考えます。つまり、音(中国語)読みの「タイ」や「シン」ではなく、訓(和語)読みの〈からだ〉と〈こころ〉という日本語(やまとことば)の原点に立って考えてみたいのです。

病理史学者の立川昭二さんは、「漢字は固体的、平仮名で書くと液体的なイメージがする」と述べています。たとえば、漢字の生命(セイメイ)ではなく、「ひらがな」の〈いのち〉ということばを用いるだけでも、現世限りのライフ(life:生命)ではなく、肉体の死後もなお生きつづけるスピリチュアル(spiritual:霊性的)な〈たましひ〉が感じられます。

オノマトペ(擬声語・擬態語)の視点でいうと、「ひらがな」の〈こころ〉は擬態語の「ころころ」が転じたもので、肩が凝(こ)る、盆栽に凝るなど、「こ」には「一点に止(とど)まる」意味があります。これにラ行の変化音「ろ」がついて、「一点に止まるように見えていて、実はころころ変わる(変化する)もの」、それが〈こころ〉の正体ではないでしょうか。たとえば、「男(女)心と秋の空」は、あてにならないことの譬えですが、なかには「君子は豹変(ヒョウヘン)す」もあります。これは「真の人物は自分の過ちに気づけば、世間的な面子を捨てて、たちどころに正しい行動に移る」というもので、この場合は豹変する〈こころ〉のいきぎよさを表しています。

それにしても、見栄っ張りでご都合主義者の〈こころ〉は、少々いやなことでもがまんして、常に「いい子」を演じたがります。これに対して、まじめで正直者の〈からだ〉は、楽しいこと快いことは大好きですが、痛いこと苦しいことが大嫌いです。強引な〈こころ〉の都合に服従させられる〈からだ〉は、やがてがまんの限界を超えて、「不快」のメッセージを発するようになります。

5. 〈からだ〉も〈こころ〉も、その理想形は「空っぽ」

〈からだ〉の理想形は、「からだは空(から)だ」、「空っぽ」ということではないかと思います。これを別の観点でいえば、「からだはオープン・システムで、内側にも外側にも開かれた、スイングドアのような存在である」ととらえることができます。

理想的な〈からだ〉のありようというのは、実は「空っぽ」であることなのです。

〈からだ〉の「からだ」的側面を考えると、昔から「便秘(宿便)は万病のもと」といわれるように、毎日規則正しく適量の排便排尿があり、〈からだ〉の中に食べ物のカスや老廃物が残っていない、「空っぽ」の状態が、健康な〈からだ〉の基本です。

〈からだ〉の「こころ」的な側面からは、次のようなとらえ方があります。

キリストが『山上の垂訓』の中で「幸いなるかな、こころ貧しき者、天国は汝らのものなり(Happy are those who know they are spiritually poor; the Kingdom of heaven belongs to them!)」と言っています。ここでいう「こころ貧しき者」というのは、英語でいえばプア(poor:貧乏な)ではなく、エンプティ(empty:空っぽ)、つまり「こころが空っぽな人」というほどの意味です。

現世の人間知が〈こころ〉にめいっぱい詰まっている人は、いくら神さまがよいメッセージを発信しても、悲しいかな、もうそれを受け容れる余地がなくなっている。水をなみなみ注いであるコップに、さらに水を注ごうとしても、追加の水はコップの外にこぼれてしまう、というのと同じたとえです。コップが最初から空っぽであれば、おいしい水をいくらでも注ぐことができるよ

うに、こころが素直で、空っぽの人は、神さまが発信するよいメッセージを受け入れることができる。そうすれば、「こころが空っぽになった、あるいは空っぽになっている人」においては、ビー・アット・ハンド (be at hand)、つまり天国は、いますでにあなたの掌中 (たなごころ・※中国語では「手心」と書く) にある、というのです。

もうひとつ、〈からだ〉の「から」は、もみがら (粃殻)、なきがら (亡骸) など、〈いのち〉を収めておくための殻、つまり容れ物 (器) のことで、接尾辞「だ」は「～である」を意味します。

たとえば、脱穀前の種粃 (たねもみ) には穀物の種子 (いのち) が、亡くなる前の〈からだ〉 (肉体) には尊い生命 (いのち) が宿っていました。

木の幹に残るセミのぬげがら (抜け殻) には、サナギからやっとなり羽化登仙したという達成感、安堵感、〈いのち〉の痕跡を感じます。粃殻、亡骸、抜け殻など、いまでは残骸にしか見えない〈から (だ)〉という器を借りることによってはじめて、私たちは〈こころ〉を豊かに表現しながら、現世のいのちを全うすることができるのです。

6. 緒形拳のことば。「病 (やま) いる」——病いを生きる、老いを生きる。

さて、「病い」といえば、『往復書簡 いのちのレッスン』(内藤いづみ×米沢慧著、雲母書房、2009年)で、連続テレビドラマ『風のガーデン』(2008年、フジテレビ系)が遺作となった俳優、緒形拳さんが、すべての収録が終わった2日後の記者会見で語った「病いる」ということばがあります。

同書の共著者 (もう一人は山梨県甲府市の在宅ホスピス医・内藤いづみさん)である評論家、米沢慧さんのブログ「いのちことばのレッスン」(2016年5月4日掲載)によると、米沢さんが『自然死への道』(朝日新書、2011年)を上梓して間もなく、東日本大震災が起こった年の夏、一人の読者から届いた感想はがきのなかに「今年も桜をむかえました。夫は病 (やま) いる身をまっとうしました」と書かれていたといえます。

その一文から、かつて緒形拳さんがテレビの記者会見で、とっさにメモした「病 (やま) いる」のことばを読み直し、緒形さんが伝えたかった「病 (やま) いる」の意味を、米沢さんは次のように書いています。

【緒形さんは八年ほど前から肝炎をわずらっており、五年前に肝がんに移行。家族以外にはそのことを一切口外せず本人の強い意思で入院治療もしないで、役者として全うしたということです。(中略) その後も追悼番組でドラマ「ディアフレンド」「帽子」も再放送されました。いずれも老いを演じたすぐれた作品でしたが、これらを観ながら、わたしは役者緒形拳が口にした「病 (やま) いる」ということばを探していました。たしか、記者会見のなかだったようにおもいますから、新ドラマの役柄で使われる言葉かもしれません。おもわずハッとして、メモしたのです。「病 (やま) いる」、「病む」や「病める」ではなく、「病い」でもなく「病いる」という表現。(中略) わたしは語源的にこだわったのではなく、「病 (やま) いる」を自己表現として、意思的な強いことばとして聴いたのです。俳優緒形拳の死はその言葉と深く関係しているのではないかと、そう思えたのです。

では「病 (やま) いる」とは何でしょうか。

「病いる」は「老いる」と同じ響きをもったニュアンスをつたえることばではないかと、そうおもいます。ここで「老いる」とは、体が衰えていく、老化していくという意味ではありません。「老いる」

とは「老いをいきる」ということばです。老いに抗うとか老いと闘うというのでもありません。

同じように「病いる」とは、体が病んでいくことではありません。また、患者として病気に抗うとか、がんと闘うということでもありません。誤解をおそれずに言ってみます。病気を健康に受けとめること、つまり「病いをいきる」ということばだったのでと。

緒形さんはそのような受けとめ方をした人ではないか、そんな思いがしたのです。】

『往復書簡 いのちのレッスン』57~58P)

なるほど、「老いる」とは「老いをいきる」ことであり、同じように、緒方さんが言った「病いる」とは「病いをいきる」ことなのです。「いきる」を「人生をともに生き切る」と読み替えれば、「老いの人生を受け止め、ともに生き切る」、「病いの人生を受け止め、ともに生き切る」となります。

7. 「生・老・病・死」を、古代漢字と和語の成立ちで調べてみる

ところで、これも仏教のことばに「一切皆苦(いっさいかいく:世の中はすべて思い通りにならない。それを仏教では「苦」という。この世には「思い通りにならない=苦」ことがあると知りなさい)」があります。一切皆苦のなかで、「四苦」として知られる生・老・病・死を、漢語(中国の古代文字である甲骨文や金文、大篆、小篆などの成り立ち)と和語(上代日本語:やまとことばの発音感性)で意味をさぐります。字義解説は、『字通』(白川静著、平凡社、1996年)を参考にしました。

☆「生」

 = 甲骨文、 = 金文

漢字の「生」は、草木が生じて大地に出る形、種子の発芽生成をあらわす象形文字。和語の「ある(生る)」は、生(うま)れ出る、あら(顕)われる、ものが生じて形をあらわすことをいう。／和語の代名詞では、自称の「ワレ」=わ・生(顕)れ=わ(私が此処に)顕れ(存在し)ている、第三人称の「カレ」=か・生(顕)れ=か(彼方に)顕れ(存在し)ている、指示代名詞の「コレ」=こ・生(顕)れ=こ(此処に)顕れ(存在し)ている、などと用いる。

☆「老」

 = 甲骨文、 = 金文

漢字の「老」は、耂と匕(か)の会意文字。耂(老)は長髪の人(かたち)で、老髪を垂れている形、匕は化の初文(初めて作られたときの字体)で、衰残(すっかり弱り衰えるさま)の人をいう。耆(し)=六十、老=七十、耄(もう)=八十の順になる。／和語の「おゆ(老ゆ)」は、年をとって老人となる意で、年老いた状態を「およし」といい、「わかし(若し)」に対する語である。また、「ここより他のところに達する、自然に到達する」の意に用いる「およ(及)ぶ」とも関係があるかもしれない。

☆「病」

疾 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎
=金文 =大篆 =大篆 =小篆

創傷をあらわす漢字の「疾」(腋の下に矢を受けた形の字)に対して、漢字の「病」は不健康な状態をいう語で、のちに「疾病」のように用いられた。／和語の「やまひ(病ひ)」は「やまふ(病ふ)」の名詞化で、「やむ(病む)」と同意語の「まふ(耗ふ)」との合成語です。「やむ(病む)」は「やむ(止む)」、つまり生命活動が停滞する意があり、「まふ(耗ふ)」には勢いを失う、動きが静まる意がある。

☆「死」

𠄎 𠄎
=甲骨文 =金文

漢字の「死」は、扁が残骨をあらわす象の「歹(がつ)」、旁がその残骨を拝する「人」の形の会意文字で、中国では屍(しかばね)を意味する語であった。「死」を生死の意に用いたのは、ずっとあとの時代だ。／上代日本人は、現世の人が亡くなることを、「いぬ(去ぬ・往ぬ)」・「さる(去る・避る)」・「ゆく(逝く)」・「かくる(隠る)」・「みまかる(身罷る)」・「みうせる(身亡せる)」などといいましたが、「死」という漢語の伝来後は、「死」と「い(去)ぬ」を結合させて、「死+去ぬ」、つまり「しぬ(死ぬ)」という言い方をするようになった。

8. 産まれることと、死ぬこと。「いのちの臨界点」ということば。

上代日本人は、今までできていたことが、急に、または徐々にできなくなった「やむ(止む)」状態を、「やむ(病む)」+「まふ(耗ふ)」=「やまふ(病ふ)」→「やまひ(病ひ)」ととらえていたのです。また、「やまふ」を病気のことだけに限定せず、「やむ(止む)+まふ(耗ふ)」で考えれば、やがて死に至る病気だけでなく、いわゆる老衰(若いときはできたことが、徐々にできなくなる)や自然死もまた、広義の「やまひ」に含まれる概念ではないでしょうか。

さきにご紹介した米沢慧さんは、『往復書簡 いのちのレッスン』のなかで、共著者である在宅ホスピス医、内藤いづみさんを、「いのちの番人」と表現しています

【さて、残しておいた「いのちの番人」についてふれたいとおもいます。この言葉には生命の質ではなく生命の深さに向き合っている姿が見てとれます。すると即座に内藤いづみさん自身のことば「いのちの臨界点」で説明できそうです。いづみさんはある対談で臨界のイメージについてこう語っています。

「赤ちゃんを産むときには、これが臨界点、これを超えたら出産というのがありますね。それと同じで、ぎりぎりまで生きると、これ以上は生きられないという臨界点があるようにおもいます」

ホスピスケアがいのちのケアにはほかならないことをおしえてもらったことばでもあります。生誕と死を同じ場所で起きる異なるいのちの出来事としてみていることです。生まれることと死ぬ

ことが、(いのちの) 臨界点ということばで一つになっているのが示唆的です。

赤ん坊は、母の体内で(えら呼吸)九ヶ月、臨界点からオギャーと一声、肺呼吸の世界に産出されて届けられます。母の意思で生まれることはありません。いのちは往きの相でたちあがり、成長期の姿となっていきます。一方、老衰期に向かう還りのいのちもまた「これ以上は生きられない」という臨界点(寿命)として受けとめられます。終末期とはその不可逆的ないのちのドラマ表現ということになります。

「いのちの番人」はそのシーンに立ちあっているのです。寄り添っているのです。

今回の書簡では「患者さんの訴えをトータルペインとして受けとめることが少しでもできるようになったかもしれない」ということばで伝わってきます。だれもがホスピスケアは全人的ケアだといいますし、そう聞きます。そして、まず、身体的痛みがあって……医療用麻薬(モルヒネ)の投与というように話は続きます。しかし、十五年のキャリアからいづみさんから出たことばはやはりちがいました。

- 患者さんの気持によりそうとモルヒネの投与量と期間がとも減る。
- 患者さんと家族の不安を減らすことが痛みを減らすことにつながる。
- 「二四時間いつもあなたと繋がっています」というバックアップが痛みを減らす。

これが「いのちの番人」の正体ということです。おもしろいのは、ペインゼロにすることではないこと。「痛みはまあまあです」という患者さんの声が聴ける関係にあることが大事だという指摘です。患者一家族に、いづみさん(在宅医)が三人目の役割として自覚的に係わることで、やさしさとやすらぎが共有されている。私の言葉でいえばファミリー・トライアングルのかたちになっているからだとおもいます。

医師だからといって医療の科学的な力(たとえば、モルヒネ)を最大の武器にしないで、むしろ二次的に利用することで、心が通い合う人間関係(これをコミュニケーションといっては誤りです)を紡ぎこんでいくということでしょう。だから、ここで「痛み」とは生きる上でだれもがかかえている痛みのことで特別な痛みではない。つまり、痛みの共感とは他者と理解し合う際の大事な左様でもあるということ。だからでしょうか、痛みをゼロにすることではなく、「(痛みは)まあまあです」ということばで生のたしかさが受けとめられている。そんなふうにおもいます。】

〔『往復書簡 いのちのレッスン』「いのちの番人」217～219ページ〕

内藤いづみさんと米沢慧さんの往復書簡で語られたことば——産まれることと、死ぬこと。いのちの臨界点——を、もう一度、ひとつずつ読み上げて、本日のスピーチを終わりたいと思います。

内藤いづみ 赤ちゃんを産むときには、これが臨界点、これを超えたら出産というのがありますね。それと同じで、ぎりぎりまで生きると、これ以上は生きられないという臨界点があるようにおもいます。

米沢 慧 ホスピスケアがいのちのケアにほかならないことをおしえてもらったことばでもあります。生誕と死を同じ場所で起きる異なるいのちの出来事としてみていることです。生まれることと死ぬことが、(いのちの) 臨界点ということばで一つになっているのが示唆的です。

ご清聴ありがとうございました。